

老人保健施設における支援相談員の退所支援のアウトカム評価項目の構築

○ 首都大学東京 間嶋健 (会員番号 8653)

和気純子 (首都大学東京 会員番号 1605)

キーワード：実践評価 介護老人保健施設 退所支援

1. 研究目的

老人保健施設の支援相談員（以後 SWer）による退所支援の役割は、地域包括ケアの推進や施設運営の観点から近年その重要性が増してきている。また、SWer の支援は利用者と同時に家族支援にも重きが置かれている。家族は主介護者になりうる存在でもあり、しばしば判断力の低下した利用者本人にかわり利用者の意見を代弁する役割などを担う。

現在、在宅中心の地域包括ケア体制の構築が図られているが、依然在宅介護は介護者に強いストレスを与えている（毎日新聞,2016）。こうした中では、家族を介護の主たる担い手とした在宅生活が常に最良の選択肢とはいえない。したがって、今日の SWer は、施設運営を成立させつつも、やみくもに退所をさせるのではなく、適切な退所先の設定や準備への支援を両立させる課題がある。しかし、運営面の実績は、単純な実数等により容易に把握できるのに対し、支援の適切性を評価する枠組みは十分に構築されてはこなかった。

先行研究においては、ソーシャルワーク（以後 SW）支援の評価項目を構築したものは極めて少なく、特に老人保健施設における SW を対象としたものは見当たらなかった。

SW 実践が評価される枠組みの欠如は、先述した顕在化しやすい実数の追求への傾倒につながりうる。特に介護領域では「福祉の市場化」による利益追求主義への警鐘が論じられてきた。また、SW の専門職性を主張する上でも、実践の適切性という根拠が乏しくなる。したがって支援対象者に評価される実践を把握した上で、実践を構築する必要がある。

そこで、本研究では、先述のとおり、家族支援の重要性に鑑み、家族によって退所支援を評価する枠組みの構築を図る。尚、本研究における「介護」とは、在宅生活に限らず施設入所生活を支える身近の監護等も含めた意味で用いる。

2. 研究の視点および方法

本研究目的からは、評価項目は、家族が SW 支援に対応した自身の状況として認識可能かつ SW 上のアウトカムとなるもので構成されなくてはならない。したがって、家族と SWer のどちらか一つの視点によって構成を図ったとしても、その両立は難しいと考える。そこで本研究では、SW 支援記録における家族の語りや、退所直前の家族に対するインタビューによって語られた退所支援に対応する内容を SW の視点から分析することとした。また、家族の立場では、SW の支援が適切になされたかどうかの評価はしばしば困難であるが、自身がどうあるかという状況については、認識可能であると考えられる。したがって、支援上のアウトカムとなりうる家族の状況認識を評価項目とした。研究対象者は A 老健にリハビリ目的に入所した利用者家族 20 名である。老人保健施設の特性として多様な入所元・退所先（例：各種病院、特養、各種民間施設、在宅）があるため、評価項目は多

様な入所元・退所先に対する退所支援の内容を包括した抽象度で構成する。質的分析は支援記録から抽出された家族の語り、および退所直前にインタビューを逐語化したものをロウデータとし、M-GTAの分析ワークシートおよび継続的比較分析を援用しつつ実施した。分析は老人保健施設のSWerであり認定医療社会福祉士を持つもの、およびSW理念や老人保健施設のSWerの役割についての研究実績を持つ研究者によって実施された。

3. 倫理的配慮

本研究における研究同意方法や個人情報保護等の倫理的配慮については、首都大学東京研究倫理安全委員会の倫理審査および調査実施施設の承認を経て実施している。

4. 研究結果

質的分析の結果、以下に示す6つの大カテゴリーと12の小カテゴリーが抽出された。①退所をするための身体的状況が整っていると認識していることを示す【身体的準備の達成の認識】は“可能な限りの身体的良好さが得られた認識”、“利用者による必要な療養生活動作の獲得の認識”から構成される。②家族の状況や環境との関係性から自分の立場を検討したうえで自ら下す決定を示す、【家族の一員としての自己決定】は、“家族成員のバランスを図った決定”と“家族決定”から構成される。③家族の状況に合わせた、計画的な退所準備が実行できたかを示す【状況に即した計画的な退所準備】は“家族状況に即した退所準備”と“計画的な準備”から構成される。④今後の介護に必要な技術や態度を習得していることを示す【介護に必要な技能の習得】は、“介護方法の理解”、“介護態度の習得”から構成される。⑤本人と家族に必要な関係各所との支援体制が構築されているかを示す【サポートの整備】は“サポートの整備”から構成される。⑥介護に臨むにあたっての負担感や可能感を示す、【本人と家族の生活の成立】は、“本人らしい生活ができそうな予測”、“介護者生活の成立の予測”、“予測介護負担感”から構成される。

5. 考察

本研究において、家族が評価可能なSW実践上のアウトカムが示された。本評価項目における状況の良好さは、SW支援によらず家族の持つ力で達成されうるため、この項目が満たされていることが、すなわち適切な支援が展開されたということではない。しかし、その逆では、支援の検討余地が残されているということを意味する。このような使い方において本評価項目は退所支援を評価するツールとなりうる。それぞれの項目を達成するための支援方法はさまざまな展開が考えられ、そうした支援の有効性を評価するツールにもなりえるだろう。

本研究は帰納法を用いて評価項目を構築しており、対象項目の網羅性を達成するものではないため、今後とも精緻化を図っていきたい。また本評価項目を用いたSW実践の向上を目指した評価を行っていくことを今後の研究課題とする。